

在宅医療検討部会ワーキンググループ活動報告

1 設置目的

24 時間在宅ケア体制の実現に向けて、多職種連携等の取組内容を検討する。

2 構成メンバー

(別紙)のとおり

3 実施日及び主な内容(5回実施)

	実施日	主な内容
第1回	令和6年9月2日(月)	多職種連携の構築に向けた課題、多職種連携で取り組みたいことについて意見交換を実施
第2回	令和6年11月26日(火)	第1回の意見を踏まえ、「制度の狭間にいる住民へのアプローチ」及び「見えないカベ」の問題についてグループワークを実施
第3回	令和7年2月26日(水)	第2回の意見を踏まえ、孤独・孤立の問題に必要な取組や区民に在宅療養の取組を分かり易く伝えるための工夫についてグループワークを実施
第4回	令和7年6月26日(木)	第3回の意見を踏まえ、①「楽しい」・「有意義」と思える地域活動、②伴走支援の意識醸成、③社会資源に期待する役割についてグループワークを実施
第5回	令和7年11月4日(火)	第4回の意見を踏まえ、「自分が地域住民として地域活動を行うとしたら、どのような活動を行いたいのか」についてグループワークを実施

4 活動概要

(1) 第1回ワーキンググループについて

意見交換を行う中で、以下①～⑦の論点が整理された。

①	在宅医療・介護連携は相当程度進んでいるが、連携の中で「すき間」が無いのか
②	MCS の利用に関するルールを検討
③	制度の狭間に埋もれた方も多く、制度サービスだけでは対応できない地域課題へのアプローチ方法
④	地域の中で、介護保険制度の理解や障害者理解の取組を推進(事前の制度理解)
⑤	「(住民間の)見えないカベ」を崩すために、住民の生活の場へアウトリーチする等、専門職と住民の顔の見える関係の構築
⑥	災害時も見据え、ハイリスク者を地域で把握できる体制づくり
⑦	職種間の仲間意識を高める(他職種業務への理解・共感)

(2) 第2回ワーキンググループについて

第1回で出た論点の中で、③「制度の狭間」と⑤「見えないカベ」について優先的に意見交換を行った結果、以下の課題が浮き彫りとなった。

「制度の狭間」にいる住民へのアプローチ方法	住民間の「見えないカベ」問題
<ul style="list-style-type: none"> ・制度の狭間に陥っている方は、「人」とつながらず、場合によってはセルフネグレクトの傾向も出てくる。 ・セルフネグレクト状態になると、心を閉ざし、<u>孤独・孤立に陥りやすくなる</u>ことが考えられる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・知らないことで偏見が生まれてしまう。介護や在宅医療に関する十分な理解を得るため、多世代に対して<u>様々な方法による周知啓発</u>が必要ではないか。 ・子どもや若い世代も含め、例えば<u>認知症や障害</u>

<p>・関係機関、専門職、地域支援者が連携し、そうした方の心に寄り添い、隙間を埋め、社会資源とのつながりを作るアプローチを検討する必要があるのではないか。</p> <p>・「ここに行けば情報が得られる」といった情報のプラットフォーム的な場所が必要。</p>	<p>の有る無しに関わらない「包摂的な場」、多世代が集えるような「ごちゃまぜの場」、「身近な地域で相談できる場」の整備も重要ではないか。</p> <p>・支援者は、垣根を外すために支援者という肩書を取り、一人の人間として地域に入っていく姿勢が大事である。</p>
--	---

(3) 第3回ワーキンググループについて

浮き彫りになった課題に対して、事務局で取りまとめた以下の①、②について意見交換を行った。

① 2040 年に向けた在宅医療・介護連携の「共通の方向性」

- ① 多世代の方に介護や在宅医療に関する制度理解が一定程度浸透していること。
- ② 区、関係機関、医療・介護等の多職種、地域支援者との連携の充実を図り、地域で支え合う体制が確立していること。
- ③ 医療・介護が必要となった場合も可能な限り在宅で安心して生活できるよう、看取りを見据えた 24 時間在宅ケア体制を実現すること。

② 共通の方向性を踏まえた、5 年後の「具体的目標」

【具体的目標①】

孤独・孤立の問題が顕在化している状況であることから、保健・福祉・医療の知識を持った専門職や関係機関が関わり、社会参加等につなげていく伴走型の生活支援を推進していく。

さらに、区、関係機関、地域の保健室、各専門職、地域支援者等が連携・協働し、地域の社会資源とのつながりの充実を図り、包括的な支援体制を強化する。

【具体的目標②】

区民の間で、介護や在宅医療に関する十分な理解を得ていくために、既存の「知って安心『在宅医療・介護支援ガイドブック』」について、在宅療養のイメージが付きやすい内容に見直しを行い、多世代の方の意識を醸成する。

(4) 第4回ワーキンググループについて

第3回の意見を踏まえ、①多世代・多国籍の方が「楽しい」・「有意義」と思える地域活動、②専門職等における伴走支援の意識醸成、③社会資源に期待する役割について意見交換を行い、以下のポイントをまとめた。

ポイント

- 1 「のっかる」意識で既存の社会資源を有効活用
- 2 食、運動・芸術、学びを通じて「楽しい」から「有意義」となる場づくり
- 3 専門職同士の「顔の見える関係」構築と、その専門職につなぐ地域の「架け橋」の育成

(5) 第5回ワーキンググループについて

第4回でまとめたポイントを踏まえ、①既存の社会資源を活用して、②地域住民と専門家が交わりながら、③食、運動・芸術、学びを通じて「楽しい」(その後「有意義」)と感じる場をつくるとしたら、どのような内容にしたいかについて意見交換を行った。

【グループワークの意見概要】

【ポイント1】既存の社会資源の有効活用について

○(個人商店に加え)大手チェーンストア・コンビニなど

いつでも、どこにでもある資源を活用し、気づきの輪を広げる。

○地域のお祭り

子ども祭りのように、障害者・高齢者も交えたごちゃまぜのお祭りも開催できると良い。

○仮装イベント

ハロウィーン仮装行列など、居場所運営者などが地域参加する良い機会。

その後、お店の方や飲食店の客も仮装し、子どもを含め多世代で楽しんでいる。

○認知症啓発イベント「RUN 伴」

見る人も走る人も楽しいイベントに。

○移動手段

坂の多い地域性を考慮した移動手段が必要ではないか。

〔【ポイント1】について〕

既存社会資源を有効活用するには、ハートフルネットワークの緩やかな見守りを担う主体の加入促進を図ることにより「気づき」の輪を広げつつ、地域住民が「多世代ごちゃまぜ」でイベントに参加できる機会を創出することが重要。

【ポイント2】「楽しい」から「有意義」となる場づくりについて

○地域のお店を巻き込んだ取組の創出

地域活動の参加頻度に応じてお土産・ポイント等を贈呈。

例) 地域の花屋と連携し、居場所に通うと花を一輪渡す活動を実施したところ、高齢者の歩行距離が飛躍的に伸びた。

○体験・ワークショップの機会提供

VR 技術を活用した体験型コンテンツの提供(VR 旅行、VR スポーツ体験、防災訓練など)

○食を核とした交流、「RUN 伴」の活性化

・多国籍の住民がいる特性を活かし、各国の料理を楽しむイベント開催。

・キッチンカーや地元飲食店を誘致し、「食」の要素を加えて走者も観客も楽しめる。

○健康関連

外出のきっかけが少ない層向けに、骨密度測定や血管年齢測定などを実施。

○専門家による講座

バリスタのコーヒー教室やソムリエのテイスティング会など。

【【ポイント 2】 について】

地域イベント開催に当たっては、多国籍という特性も考慮しつつ、「飲食」、「体験」、「測定」の3つの要素を取り入れながら多様なニーズに合わせて選択肢を示し、多世代が継続的に交流・学び合える場を構築していくことが重要。

【ポイント3】「顔の見える関係」構築と、地域の「架け橋」育成について

○人とのつながり

専門職の面を全面に出すのではなく、たまたま免許を持っている存在として関わる方が、垣根が低く、一人の人として繋がれるので、距離が縮まりやすい。

○つなぎ役の意識

解決に直接結びつかなくても、まずはつなぐことを意識する。

○地域に入り、情報を渡す役割を増やす

定期的に高齢者宅に何う宅配業者、飲料配達業者等を活用して情報を周知する。

【【ポイント3】 について】

ひとりの人間として関わる姿勢や、直接解決に結びつかなくても「つなぐ」意識を大事にする地域の主体をエンパワメントしていくことが重要。

5 今後の予定

2 月に第 6 回ワーキンググループを開催予定であり、改めてこれまでのワーキンググループ活動を報告し、今後の活動の展開について意見交換を行う。